向日葵だより
黒沼共同会計事務所
Kuronuma Accounting Office
あなたの快経パートナー
第３２４号
2024年9月10日発行

「昭和１００年目の現実」

今年の夏の全国高校野球選手権大会で京都国際高校が東京の関東第一高校を破り、頂点に立ちました。同校は1999年の野球部創部以来、甲子園での優勝は初めて。同校の母体は京都に居住する在日同胞が募金で 1947 年に建てた京都朝鮮中学で、1958年に学校法人「京都韓国学園」として京都府知事の認可を受けた学校です。だが、少子化で人口が減るにつれ在日同胞の生徒の数が減少。学校を再生するために打ち出された秘策こそがまさに「野球」だったそうです。2010年ごろから、野球部も成果が出はじめたことで雰囲気が変わった。160人の全校生徒中、野球部員は60人とのこと。少数精鋭の特異な歴史を持つ高校野球部の見事な全国制覇であった。(韓国語の校歌も注目を浴びています…)

そんな夏の大会が終わったころ、山形新聞紙上のやましんサロン（読者の投稿欄）に「高校野球の偏見をなくそう」という意見が載りました。…「今年の山形大会では、鶴岡東が優勝し県代表として甲子園球場に駒を進めた。…ベスト16入りは逃したが、強豪校を上回る素晴らしい試合を見せてくれた。地元愛が強い県民には「県外出身者ばかりのチームが甲子園で勝ってうれしいか？」と話題にする人がいる。今回の同校はベンチ入り20人のうち19人が県外出身者のようだ。…「野球の強い高校に入って甲子園を目指そう」と決めた彼らは、親元を離れ高校生活を野球に打ち込んできた若者たちだ。…「山形代表」の看板を背負った彼らが、全国の強豪校と戦ってきた。同校ナインには山形のチームを選んでくれたことに感謝するばかりだ。…山形には複数のプロスポーツチームがあり、県内出身者の有無に関係なく県民は熱く応援している。高校野球に対する偏見はそろそろなくすべきでないか。」

ところで、子どもや教員、学校の数が減少し、学校の運動部活動の維持が厳しくなりつつあり、現場では危機感が強まっているそうです。スポーツ庁は地域クラブへの移行などを打ち出し、日本中学校体育連盟は今年度から中学校体育大会への地域クラブの参加を認めたほどです。そもそも人口減少が加速する中、日本の子どものスポーツ環境はどうなっていくのでしょうか－。当然、子どものスポーツをめぐる状況も一層深刻化しています。

文科省の学校基本調査で22年度と10年前の12年度の中学を比べると、22年度の中学校の数は1万12校（12年度は1万699校）、中学生は320万5220人（同355万2663人）、教員数は24万7348人（同25万3753人）といずれも大幅減。15年後の38年には、中学生が250万人台との推計もあるほどです。それでも野球やサッカー、水泳、新体操などは（学校の部活動ではない）クラブなどが普及しており、全体の選手数などを一概に判断できませんが、状況は確実に変化しています。学校の部活動は、どんな生徒でも、気軽にお金もあまりかからず、スポーツを経験できる貴重な場所ですが、歯止めがかからない人口減少の中で、その維持は厳しくなっているのです。

まもなく昭和100年を迎えようとする時代、出自にこだわることなく、若い青少年が真摯に競技に取り組む姿勢を心から応援したいものです。

公認会計士　黒　沼　　憲